▶特別寄稿

ヘルシンキ茶話

横澤 宏一

会社員時代にクラブに所属し、初歩の茶道を学んだこともあって、大学に移ってから卒業式の日に大学の部屋で簡単な茶会を開くのを恒例にしている。自分の研究室の卒業生を招くのだが、この日は女子学生（たまには男子学生も）和服を着てくるので実によく映えるのである。使う茶道具はごく簡単なものであるが、大学に移って早々の 2009 年にフィンランドの大学（現・アアルト大学）の客員研究員として現地滞在した時にも持っていった。フィンランド滞在中に経験した茶道にまつわる話をいくつか紹介したい。

乱世の茶、泰平の茶

所属していた茶道部は表千家流の先生の指導を仰いでいた。数あるお茶の流派の中でも代表的なのは表千家と裏千家である。その所作はよく似ているが、表千家の時に大胆な所作を見ると、表千家は乱世の茶、裏千家は泰平の茶だと思うことがある。利休の孫である千宗旦は、時代が戦国から治世に移るのを見て、それまでの流儀を息子に譲って身軽になり、自らは屋敷の裏手に隠居して泰平の世にふさわしい繊細な所作を試したのではあるまいか。宗旦の隠居所（今日庵）に始まる裏千家は、時代に合ったためか最大の流派となり、国際化も積極的に推進して世界中に茶道教室や茶室を開き、日本文化の発信に大きな役割を果たしている。

大宗匠とセーラー服

裏千家の第 15 代家元は千宗室の名前を当代家元に譲って千玄室となり、今も大宗匠として活躍されている。その講演会が首都ヘルシンキで開催されたので、フィンランド人の同僚を誘って出かけた。立礼（椅子席）の茶席も設けられ、2 階にある茶席の順番待ちの行列が、階段下まで延びる大変な人気であった。和服を着てくるフィンランド人までいる。行列に並ぶのは早々に断念したが、並んでいる

千玄室大宗匠と筆者〈向かって右〉

人の中に少なからずセーラー服姿の女子高生がいるのに気がついた。

フィンランドで制服姿を見ることはまずない。意外に思って連れのフィンランド人に「フィンランドの高校でも制服があるのか」と訊くと一笑に付し、「あるわけないだろ。あれは日本のアニメのコスプレだ。」という。少し考えて合点がいった。日本文化の著名人の講演会に行くのに、日本らしい服装をしていこうと考えた場合、和服を着てくる人もいれば、アニメの服装を選ぶ人もいるということである。これは勘違いなどではない。日本文化に対する敬意である。何より色白で手足が長く、金髪のフィンランド人にはセーラー服がよく似合う。日本人が着るよりむしろアニメの世界観に近いのであった。

持参した茶道具

講演会には駐フィンランド大使も来ておられ、その紹介で大宗匠と直接お話しし、サインまで頂戴した。日本ではまずあり得ないことではあるまいか。

要塞の中の茶室

徳有庵の入り口

講演の中で、大宗匠が監修してヘルシンキに作った茶室が紹介された。徳有庵という。調べてみると、正確にはヘルシンキ沖合のスオメンリンナ島にある。スオメンリンナは半日あれば歩いて 1 周できる小さい島だが、かつては重要な要塞であった。ちなみにスオメンリンナとは「フィンランドの城」という意味である。今は世界遺産に登録され、行楽地、観光地として整備されている。さらに調べると、徳有庵は普段は非公開でお茶の稽古が行われているのだが、7 月初旬の週末に七夕茶会が催され、一般公開されるのである。早速行ってみることにした。

講演でも写真が紹介されていたが、茶室があるのはいかにも要塞らしい頑丈な石造りの建物の一室である。入り口は海側ではなく陸側にあり（要塞なのだから当然である)、かなりわかりにくい。表札のような小さい看板があるだけなので、通りかかってもまず茶室とは思わない。

おそらくは砲座が並んで据えられていた場所で、それほど広くはなく、中に茶室と水屋（準備室）がしつらえられている。天井は砲撃に耐えられるドーム型で、石組みがそのままむき出しになっている。侘びとは少し違う、武骨で簡素な作りであるが、茶室としての美意識が細部にまで行き届いた茶室であった。

亭主側は日本人とフィンランド人が半々くらい。私以外の客はフィンランド人で、数名ずつ入れ替わり来訪し、日本語とフィンランド語と英語が入り混じる、一風変わった、しかし落ち着いたいい茶会であった。とは言え 7 月のフィンランドである。七夕茶会ではあるが、夜半まで空は明るく、星は見えなかった。

ヘルシンキ芸術祭

7 月の下旬には芸術祭があり、去りゆく夏を惜しむかのようにヘルシンキ中が芸術に染まる。映画館や劇場はもちろん、思いがけない場所でイベントが開かれてい

る。例えばヘルシンキで一番大きいストックマンデパートのショウウィンドウに飾られている人形たちが、閉店時間と同時に突然踊りだしたりする。実は人形ではなく生身のダンサーがショウウィンドウの中でじっと閉店まで動かずに待っていたのである。

市内の店では徳有庵で知り合ったフィンランド人の茶会が開かれた。裏千家で業躰（住み込み）を経験した本格的な茶人である。芸術祭の一環なので、お点前（お茶をたてる所作）もパフォーマンスである。通りに面したガラスの前に点前座がしつらえられており、本格的な着物姿で点前を披露する。解説者もついて説明をしており、通りには大勢の人だかりができていた。実際に茶会に参加する人はそれほど多くはなく、チケットを買うとそれほど待たずに入ることができた。客座は立礼席で、5〜6 人分あり、正客以外のお茶は半東（助手）が水屋で点てて運ぶ。私の席が終わり近くなった頃、茶碗を持った半東が何やらまごついて、亭主に話しかけている。どうやら数を間違えたらしく、一服余ったのである。私はたまたま正客座にいたのだが、こういうときにやるべきことは決まっている。「どうぞご自服を」と言った。むろん日本語である。亭主は落ち着いて一礼した。「お菓子もどうぞ」「いえ、お菓子は結構。お相伴いたします。」というやり取りがあり、亭主が自分で茶を飲むという、普段はあまりやらない所作を解説者が面白おかしく説明したらしく、通りがどっと沸いた。いつまでも日の沈まない夏の宵の、明るく楽しい茶会であった。

不時（ふじ）の夜咄（よばなし）

芸術祭の茶会

私の滞在は 9 月末までで、ちょうど夜が昼より長くなり始める季節であった。日本でも「秋の日はつるべ落とし」などというが、夏は白夜、冬は極夜のフィンランドだと、日照が毎日短くなっていくのが実感としてわかる。昨日は明るかった時間に起きても今日はまだ薄暗いのである。そんな中で滞在の最終日を迎えた。最後の日にお礼の茶会を開き、

不時の夜咄

持参した茶碗と茶器で研究室の皆にお茶を点てた。その夜は現地で知り合ったロシア人研究者が指導教員の自宅に招かれており、私もご一緒させてもらうことになった。

夕食をごちそうになりながら、今日の茶会の話などをするうちに、ここでも茶会はできるのか？という話になった。茶道具はそのまま持ってきている。お菓子の残りは研究室に置いてきたが、幸いお茶はまだたっぷり残っている。できそうである。では、やろう、ということになった。

せっかくなので趣向を考えた。フィンランドは世界中でロウソクの消費量が一番多い国である。どの家にも大量のロウソクとしゃれた燭台が必ずある。ロウソクの明かりだけで茶会をやることになった。これを「夜咄」という。

そこまでやるならテーブルで立礼だとちょっと物足りない。ほとんどのフィンランド人は自宅では靴を脱ぐので床は清潔である。念のためガラスのテーブルの脚を外して床に置き、真ん中にロウソクを立て、他の照明をすべて消して皆が周りに座った。即席ながら（茶道では「不時」という）思いがけず印象深い茶会になった。この季節の日暮れは早い。フィンランドにはこれから長い冬と夜の季節が来る。

＊

茶は総合芸術である。抹茶やお菓子、懐石料理のみならず、焼き物や漆器などの器、掛け軸の書画、季節の花、焚かれている香、茶室や庭のしつらいなど様々な要素が茶事を形作る。どれ一つとして重要でないものはないが、最も重要なのはおそらく客と亭主の対話である。茶事を構成するあらゆるものは、客と亭主、客と客との出会いの場、対話の場を提供するための舞台装置である。そのことは場所が世界のどこであろうと、どういう道具立てであろうと変わることはない。⏎

よこさわ こういち

1984 年 北海道大学理学部卒業卒寮
北海道大学大学院理学研究科修士課程を経て（株）日立製作所に入社
在職中に北海道大学大学院工学研究科博士課程に社会人入学
2007 年 北海道大学医学部保健学科教授
翌年 北海道大学大学院保健科学研究院教授（現職）